i-農力だより

2022年秋号（160号）

農業 TOPEYE ・・・・・・・・・・・・P.2
農家さん訪問記・・・・・・・・・・・P.4
季節のご相談から・・・・・・・・・P.8
読者プレゼント・・・・・・・・・・・P.10
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.10

（農業 TOPEYE）全国稲作経営者会議
会長　古谷 正三郎 氏

吹田りんご園の「はるか」

農業 TOPEYE

第12回

「農業 TOP EYE」は、経営・農業機械・人材教育・販売などをテーマに、多彩な業界のキーパーソンにインタビューし、農業経営に役立つ情報をお届けするコーナーです。
今回から新たに、「地域農業の未来」をテーマとし、それぞれの地域の課題や取り組みを担い手に取材して特集してまいります。
第１回は、全国稲作経営者会議の会長を務める千葉県山武市の古谷正三郎氏に、生産者組織トップとしてのビジョンや一生産者としての取り組みなど、「地域農業」について語っていただきました。

一人ひとりが農業、人生の柱をつくること。それが、地域農業の未来へとつながる。

全国稲作経営者会議
会長
古谷　正三郎 氏

プロフィール
以前は全国稲作経営者会議で青年部会長を７年間務め、昨年７月より同会議会長に就任。2013 年からは千葉県山武市の農業生産法人（株）大地の恵みで、代表取締役社長を務める。他に、一生産者として、水稲 20ha（ヒメノモチ、峰の雪）、ぶどう 30a（シャインマスカット）を作付。

取材日：2022 年 7 月 13 日

千葉県における農業の現状、課題について教えてください。

千葉と言えばだいこん、キャベツ、メロン、いちごなどの農産品が有名で、大消費地の東京と近接していることもあり、ご存知の通り農業産出額では全国屈指の農業県です。水稲に視点を絞ってみると、千葉は湿田地帯が多く、土地利用型農業としては小麦やだいずといった転作には向いておらず、以前から水稲しか作付けできないという稲作農家が多くを占めていました。

また、販売の面では、周知のように米価低迷が続いていることが、千葉の稲作経営においても課題になっています。相場を下げている要因の一つは私たち稲作農家自身。『安くても売り切ってしまう』というスタンスを続けている限り、米相場は上がらないような気がします。

そうした課題には、どのような対策が必要でしょうか。

農地における今後の対策として、こうした湿田を水稲以外の転作地としても利用できるように、排水対策などの土地改良を地域ごとに実施していく必要があると思います。すべての農地を土地改良するのは無理なので、残していくべき農地とそうでない農地を切り分けて、地域ごとに土地改良に向けて検討していくことが大切です。例えば、私が水田を経営する山武市では、一部の圃場の区画整備を街ぐるみで目指しています。水田では、水を引き込む「水口」の反対側に、排水用の「水尻」を設置するのが一般的ですが、この場合、かけ流しなどをする際には水口と水尻の開閉作業のために畦を歩いて往復する必要がありました。そこで、このムダな労力をなくすために、「水口」と「水尻」を同一側に設置できるような区画に整備しようという計画です。

また、販売面においては、大規模農家の意識改革だけではダメで、米生産のベースを支える中小規模農家や兼業農家の方々一人ひとりが、もっと“経営者”として、今後の展望を含めた考え方にシフトする必要があるのではないかと考えています。

「地域とスマート農業」という観点では、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

千葉県でも水田での農薬や肥料散布にドローンを活用する生産者が増えてきました。また、GPS 技術を活用したトラクターや田植え機の自動運転や直進アシストなどは、収量や生産性向上につながるので、経営状態に合わせて積極的に取り入れていくべきだと思っています。作業短縮で得られた余暇時間や省力できた労力を利用すれば、大規模化を進めていく上での力強い戦力になってくれることでしょう。

私が経営する農業法人 ㈱大地の恵みでも直進アシスト機能を活用したトラクターや田植え機を利用していますが、これら高精度な位置情報を利用するには RTK※と呼ばれるアンテナ基地局が必要です。私たちの山武市でも RTK がまだまだ整備されていないので、今後の整備に向けた取り組みが課題ですね。

※ RTK= Real Time Kinematic（リアルタイム・キネマティック）地上に設置した、基地局の位置情報データによって、より高い精度の測位を実現する技術

会長ご自身の農業経営スタイルについて教えてください。

私の家系は五百数十年続く農家の家系で、全国稲作経営者会議の初代会長でもある私の父の農業経営を引き継いだのが 28 歳の時でした。就農以来、米の直接販売の販路を開拓してきましたが、2009 年には共同創業者である現相談役と 2 人で加工用米（もち米）の販売を手がける㈱大地の恵みを設立しました。現在では県内農家 50 戸と連携して年間約 5 万俵を販売し、餅や煎餅の加工会社などの実需者と取引をしています。

加工用米に目をつけたのは、米のマーケット事情に詳しい現相談役が『もち米はニッチだけど実需からの引き合いが強いはず』と分析していただいた。

▶続きは i- 農力サイトへ

農家さん訪問記

第 143 回
青森県平川市　吹田りんご園
吹田成功（あきのり）さん

立木品評会で２大タイトルを受賞。若きりんごの匠が目指すのは、未来の産地づくり、人づくり。

青森県りんご立木品評会 集団の部で「全県第一席」と「農林水産大臣賞」を受賞

ご存知の通り青森県は、りんごの生産量が日本一。なかでも西に弘前市、東に十和田湖をのぞむ平川市の広船地区のりんごは、県内一の品質で名高い。農林水産大臣賞の受賞回数が県内トップで、その栽培技術や品質の高さは、各方面から高い注目を浴びている。

５千名以上のりんご生産者が所属する公益財団法人青森県りんご協会には、「支会」と呼ばれる組織が各地域にあり、広船地区の「広船支会」には約 100 名が所属する。取材で訪れた吹田りんご園の吹田成功さんは、その広船支会のなかで最も脚光を浴びる若手生産者だ。

吹田さんが営農する広船地区には、
今までの受賞歴を記した看板が建つ

吹田さんが支会を代表して出展した立木は、令和３年度の青森県りんご立木品評会 集団の部において、全県第一席と農林水産大臣賞をダブル受賞した。ひとつだけでも受賞が難しいと言

令和 3 年度 青森県りんご立木品評会 集団の部では、全県第一席と農林水産大臣賞をダブル受賞

われている賞を両方受賞するのは、稀有な例なのだそうだ

「印度」「国光」「紅玉」「旭」など あえてレトロな品種を手がける

吹田りんご園では約 2ha の園地で、つがる、スイートメロディ、早生ふじ、トキ、シナノドルチェ、秋映、シナノスイート、シナノゴールド、名月（ぐんま名月）、ふじ、王林、美丘など、早生から晩生まで多様な品種を栽培している。ネットによる個人直販も手がける吹田さんは、顧客の生の声を取り入れて、独自の視点で栽培品種を決めているそうだ。

「りんごの新品種って、市場でもいい値段が付くので、農家は新しいりんごが出ると栽培したがるものなんです。でも、僕は新品種を追いかけたりしません。だって、新品種をつくる側の農家がその良さや特性を分かりきっていないうちに生産しても、消費者にその良さが伝わるはずないですよね？ 僕はむしろ新品種ではなく、昔の品種を見直すようにしているんです。例えば、王林の父である“印度（いんど）”や、ふじの母である“国光”、つがるやジョナゴールドの父である“紅玉”などは、消費者の方から『懐かしいので食べてみたい』とウケがいいんです」。

農家さん訪問記読者の皆さまは“旭(あさひ)”というりんごの品種をご存じだろうか。現在は国内でごくわずかしか栽培されていない、幻のりんごとも言うべき品種だ。吹田さんは、その希少な“旭”を栽培する生産者の一人である。この“旭”は、明治時代に欧米から導入されたそうだが、元々の品種名は“McIntosh red”で、なんと、あの米国アップル社のパソコンブランド“マッキントッシュ”の由来になっているのだそうだ

希少な品種「旭」の前で。「旭」は米国アップル社のパソコン“マッキントッシュ”の由来にもなったりんご

地上と地下のバランスを 考えた剪定が重要

さて、話題を広船支会のりんごに戻そう。果実そのものの品質を競う“青森県りんご品評会”、収穫前の作業のしやすさや木の姿の美しさなどを競う“青森県立木品評会”。両品評会における広船支会の受賞歴は 30 回を超える。こうした輝かしい成績をもたらす秘訣はどこにあるのだろうか。

「広船支会の土壌は“広船土壌”と言って、粘土質で硬めの火山灰土。この硬めの土壌がりんごの根に適度なストレスを与えて、品質に好影響をもたらしています。また、標高が高い地区なので昼夜の寒暖差が大きいのも、高品質な要因の一つです」と吹田さんは言う。しかし、気候風土以上に広船支会のりんごの品質を支える最も大きな力は、先達の方々から受け継がれた栽培管理や技術の共有なのだそうだ。

「りんごはやはり剪定が最も重要です。りんごでは、地上部の枝張りと地下部の根張りが鏡のように相対しており、地上と地下の関係でバランスを保っています。刺激を与えないと人間が成長しないのと同じで、収穫後の剪定では、木に刺激を与えて樹勢をコントロールする必要があります。しかし、やみくもに剪定してしまうと、その枝に相対する根っこも弱くなって養分の吸い上げが落ちてしまう。人間もりんごの木もバランスが重要だということですね」。

「やみくもな剪定は、木がダダをこねてしまう」と、
吹田さんは剪定の重要さについて語る

開花直前の散布で「黒星病」への効果を実感

高騰する肥料の代替として、
摘果した幼果で土壌の微生物を増やす試みも

りんごづくりは剪定が重要、と話す吹田さんに、それ以外ののポイントについて挙げていただいたのが「薬剤の適期散布」と「雑草管理」。特に病害虫防除における適期散布に関しては、品質向上において手を抜けない基本作業、と吹田さんは力を込める。

一部の系統の薬剤で耐性菌が発達したことを背景に、平成28年ごろ青森県の産地全体で黒星病が大発生したのは、りんご生産者の方々にとって記憶に新しいところではないだろうか。吹田さんは昨年から、りんごの開花直前の病害防除に新規殺菌剤カナメフロアブルを導入。昨年、今年とその効果を実感したと言う。

「去年も今年も黒星病は出ていません。予防だけでなく治療効果もあるということなので、安心感がありますよね」と眩しそうにりんごの木を見上げながら話してくれた。

作り手の腕の差が出る「丸葉栽培」にこだわる

「栽培にしても、販売にしても、自分の考えをしっかり持つことが大事」と吹田さん。近年は、高密植わい化栽培にシフトする生産者の方が増えている中、あえて丸葉栽培※1にこだわるその理由について聞いてみた。

「わい化栽培※2は、果実への日当たりが良く品質が向上しやすい、反収が上がりやすい、剪定がラクなどのメリットがあります。でも、ネズミの食害に弱くて、地上部や根っこをかじられるて樹勢を落としやすく、夏期に高温が続くと果実が日焼けを起こしやすい。一方、丸葉栽培は、剪定に手間がかかり、木の個性や果実の成る位置によって品質にバラツキがあります。そして、その木をどう生長させるかは我々農家の腕次第。剪定のやり方次第で品質に差が出る栽培法なんです。それに、丸葉栽培はネズミに多少かじられてもびくともしないし、木が大き

丸葉栽培の木（写真左）とわい化栽培の木（写真右）吹田さんは丸葉栽培にこだわる

く根っこも強いから、風や雪にも強い。枝や葉が大きく広がっているのでその分日陰も多く、日焼けも起こしにくいんです。だから、うちのりんご園では、丸葉栽培とわい化栽培を半分ぐらいずつ採用していて、それぞれの栽培法のメリットを活かした経営を心掛けています」。

※1 丸葉栽培：主にマルバカイドウを台木にした栽培法で、生育旺盛で樹体は大型。ある程度の自然災害にも強いなどのメリットがある。
※2 わい化栽培：根の部分がマルバカイドウで、その上にわい性台木と穂木を組み合わせた栽培法。多収であり、コンパクトな樹体による作業効率化などがメリット。

次世代の農業活性化を目指し
修学旅行生の農業体験を支援

昨今、“持続可能な農業”がことさら問われるようになった。吹田さんは、次世代の農業を担う“人づくり”が欠かせない、と農業の将来を真摯に見据える。中学や高校の修学旅行生を農業体験で受け入れるグリーンツーリズムも、その想いを形にする取り組みの一つ。新型コロナの拡大前までは毎年春と秋に、北海道や千葉県などの修学旅行生を受け入れていたそうだ。

「いくらスマート農業で機械化が進んでも、剪定は人間にしかできません。何よりもまず、人づくりなんです。就農者は我々産地が育成していく必要があります。僕は就学旅行生たちに、『うちはこれだけ儲かっている』『休みはこれだけとれる』とリアルな話を必ず伝えます。農業への興味はもちろんですが、生活が成り立つのかどうかという観点は、実際の就農には欠かせない情報だからです」。

今後の目標を吹田さんに伺うと「個人的な目標は特にありません」という答えが返って来た。「ただ、農業を目指す人たちが増えてくれればそれでいい。普段のりんごづくりを含めて僕がやっている取り組みが、その手助けになるなら、農家冥利に尽きますね」。

ダブル受賞という確かな実績に裏打ちされた、県内屈指の技術力。吹田さんの匠の技を培ってきた原動力の一つは、その謙虚で純朴な人柄と農業に対する想いなのではないか。そう感じずにはいられない青森の一日であった。

季節のご相談から

お客様相談室

1．佐賀県　農家の方

Q：柑橘農家です。ここ数年果樹カメムシの発生が多く、出荷する果実に被害を受けています。今年も注意報が発令され被害が予想されます。果樹カメムシに対する効果的な防除法について教えて下さい。

A：かんきつを加害する果樹カメムシは、口針で果実を吸汁することにより、果実の変形や落果、腐敗の原因となります。被害は収穫終了まで続き 8 月以降は密度も上がります。防除には、殺虫効果だけでなく吸汁阻害効果のある薬剤が効果的です。

残効性も 10 ～ 14 日と長く、殺虫効果と吸汁阻害効果の高いダントツ水溶剤で防除します。

また 10 月頃まで被害が続きます。収穫直前に吸汁加害された果実は収穫後も腐敗が進む可能性もあるので、収穫前日まで使用出来るダントツ水溶剤は使い易い薬剤となっています。

防除の要点は広域での一斉防除と飛来初期の密度の低い時に行うことです。飛来初期に薬散を逃すと多数の成虫が飛来し被害を大きくします。防除所等では発生推移の情報提供も行っていますので、これを参考にして適期の防除に努めて下さい。

2．山梨県　農家の方

Q：ぶどう農家。ブドウトラカミキリの被害が多く収穫後の秋期防除を行いますが、ガットキラー乳剤の防除法について教えて下さい。

A：ブドウトラカミキリの越冬幼虫は新梢の表皮下から木質部に喰入し加害を行います。

気温が高くなる 3 月頃から食害をはじめ、夏季の成虫羽化、産卵、喰入を経て 11 月位まで食害が続きます。防除は収穫後の秋期散布と休眠期の散布を行ないます。

幼虫の発育初期に殺虫効果が高いので、秋期防除は落葉後の 10 月下旬から 12 月に防除します。ガットキラー乳剤 100 倍液を樹幹部及び主枝に十分量散布します。

また休眠期防除の場合は 2 ～ 3 月下旬の萌芽前に越冬幼虫対象防除を行います。2 月下旬に樹幹部及び主枝に散布しますが、節部の粗皮下に喰入しているので、薬剤はたっぷり散布してください。萌芽後は新芽に薬害を生じますので、必ず萌芽前に散布を終えて下さい。

また、収穫後期では成虫の羽化最盛期となるので、カメムシ類

やチャノキイロアザミウマの同時防除を兼ねてダントツ水溶剤の 2000 倍～ 4000 倍を散布して、成虫の産卵、幼虫の喰入防止効果をねらいます

３．大阪府　農家の方

Ｑ：秋播き「たまねぎ」の元肥、追肥に適する肥料はありませんか？

Ａ：畑作用緩効性化成肥料「ＣＲスミカエース１０、以下ＣＲ１０」をお薦めします。

3 成分比は、窒素 10% - りん酸 10% - 加里 10%で、微量要素（苦土、マンガン、ほう素）入りです。窒素の内 2%が硝酸性、8%がアンモニア性です。また、硝酸化成抑制材「DCS」がアンモニアの硝酸への変化（硝酸化成）を抑制する緩効性肥料です。30℃・畑条件での肥効持続期間は、化成肥料の 30 ～ 45 日に対し、ＣＲ１０は 80 ～ 100 日です。一般に、畑作物は好硝酸性ですが、たまねぎ等ヒガンバナ科の作物は、アンモニア栄養も行うため、ＣＲ１０が卓効を示します。

たまねぎは、品種の早晩により、作付時期、貯蔵性等が異なります。以下、貯蔵用と新たまねぎ用に分け、生育と施肥のポイント、施肥設計例を紹介します。

まず、貯蔵用では中生・晩生品種を 9 月後半に播種し、11 月下旬に定植、5 ～ 6 月に収穫します。たまねぎの生育は、地上部の発育期と球の肥大充実期に分けられます。

施肥のポイントは、

①寒さが厳しくなる前に、根量を増やし、十分な葉面積を確保できるよう、元肥を適量施し、初期肥効を確保する、

②厳冬期には、一旦生長が止まり（休眠し）ますので、肥効を高めすぎない、

③球肥大促進のため、早春（2 月下旬）再び生長が始まる直前に、追肥する、

④貯蔵性を低下させないよう収穫期には肥効が落ちる、です。

なお、抽苔は多肥、早春の窒素不足等により促進されますので、ご留意ください。施肥例は、「ＣＲ１０を元肥に 10a 当たり 100kg（N10kg）、追肥に 120 ～ 150kg（N12 ～ 15kg）」です。

次に、新たまねぎ用では、極早生・早生種を 9 月上旬に播種し、マルチ栽培します。定植は 10 月で、収穫は 3 ～ 4 月です。生育期間は貯蔵用に比べて短く、休眠はほとんどないが、貯蔵には不向きです。求められる肥効は、「栽培期間中ずっと持続する」ですので、ＣＲ１０を 200kg（N20kg）全量元肥施用してください。

これまでのプレゼント（写真は３名分）

地方の特産品（お菓子や加工品）を、愛読者の方々に抽選でプレゼントします。たくさんのご応募お待ちしています！

応募期間：2022 年 10 月 3 日（月）~11 月 11 日（金）
応募条件：本誌のご意見・ご感想を 50 字以上お寄せいただいた i- 農力会員様
賞　　品：青森県の特産品詰め合わせ
当選者数：３名

ご応募はこちら

編集後記

農家さん訪問記の取材日は７月末でした。その翌週から青森ねぶたまつり、弘前ねぷたまつりが３年ぶりに開催されるとのことで、新青森駅と弘前駅にはそれぞれ特徴のある灯籠が展示されており、現地の方の期待感が伝わってきました。弘前駅から取材先の吹田さんの農園に向かう途中、りんご園が道路周辺ばかりでなく、山の斜面にも緑色に連なり、青空の元でとても印象的な風景でした。吹田さんの農園では、毎年、美味しいりんごを心待ちにしているお客様の様々なご要望の為に、栽培されているりんごの種類の多さに驚かされました。吹田さんが丹精込めて育てられたりんごのジュースを飲ませていただきましたが、新鮮なとれたてりんごがそのまま濃縮された様で、経験したことのない美味しさでした。尚、８月上旬の記録的な大雨により青森県でも多くのりんご農家様が被害を受けられたとのこと。わが国が誇る青森りんごが更に飛躍できるように早期の復旧をお祈り申し上げます。

農業 TOP EYE の取材では千葉県山武市を訪問しました。成田空港からそう遠くない場所で、広大な田園風景が広がっていました。古谷さんのもち米の生産に特化されたお話しは、地域農業を活性化させる農業経営の例として、とても参考になる取り組みだと感じました。加えて、新たにシャインマスカット栽培にもチャレンジされているとのことです。今後の農業のあり方や地域の様々な課題に対して提言され、一人ひとり「５つの得意分野を持とう」とのお話や、常に新しいことに挑戦する精神、そして地域との前向きな取り組みを率直に話される古谷さんのお人柄がとても印象的でした。

次回も『地域農業と未来』のテーマで記事をお送りする予定ですので楽しみにしていてください。

大塚

2022 年 10 月 3 日発行　i- 農力だより 秋号　通巻 160 号
発行人／河西 康弘　編集人／鈴木 欣也
発行／住友化学株式会社　アグロ事業部

大地のめぐみ、まっすぐ人へ
SCG GROUP
住友化学
動画チャンネルはこちら！
〒103-6020 東京都中央区日本橋2丁目7番1号
お客様相談室 0570-058-669
農業支援サイト i-農力 https://www.i-nouryoku.com
住友化学アグロ事業部